

6. 皆生温泉発見の秘話

< 紀一族による皆生村開拓 >

- ・ 天正年間（1580 年代）八幡新兵衛が村民を募って開発をしたといわれている。
 - ・ 当時、未開の地へ踏み入ることは大変な勇気がいったことであろう。その労が認められ、当時米子を支配していた吉川広家氏から警察権を与えられたほか、農作物、漁獲物とも税金を三年間免除されたという。
- ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
- ✓ いくら未開の地といえども誰でも開拓できたはずはない。皆生温泉を開拓した八幡氏も、元をたどれば伯耆の鉄の交易を支配した紀氏の一族であったという。

< 皆生温泉の発見 >

- ・ 皆生温泉発見のいきさつは、大正 12 年に発行された「皆生温泉案内」松田亀三郎著に記されている。
- ✓ 明治初年の頃、浜辺から百間余り（約 200m）の沖に泡を吹きだしているところがあり、漁師たちはこれを「泡の場」と呼んでいた。はじめは魚が集まって息をしているのではないかと網を打ってみたがどうもそうではない。そこで舟から竿をおろし、伝って潜って見たところ、数十尺（約 10～12m）の海底からあつい温泉がわいているのを発見したという。これが皆生温泉発見の一齣である。

< 皆生温泉の誕生 >

- ・ 明治 33 年 9 月 4 日漁夫たちが海岸の浅瀬でわき出している温泉を発見し、一升瓶に温泉をくみとった。これが皆生温泉誕生の瞬間である。その日、20 人ばかりの漁夫がいて彼らの網小頭であった山川忠五郎氏が代表として発見者となった。
- ・ その場所は、車尾から続く皆生温泉三条通り（皆生通りの東側）の突き当たりの沖合にあたるという。
- ・ ここで一つの疑問が湧いてくる。なぜ、明治初年頃に 200m も沖合で見つかった温泉が、明治 33 年には海岸の浅瀬でくめたのか。もう分かると思うが、その約 30 年間の間に皆生温泉の海岸が 200m も沖に増えたことを物語っている。
- ・ このことは、皆生温泉の誕生秘話でもあり、もう一つの見方をすれば、たたら製鉄によって日野川流域から流れ出た土砂が作った、広大な国土づくりの一齣ともいえる。

< 海との戦いの始まり >

- ・ 大正 9 年、近藤家によるたたら製鉄の歴史に幕が下ろされた。
- ・ 国土交通省の資料によれば、大正 4 年頃から海岸の浸食は始まっていたとある。洋鉄の生産に押されたたたら製鉄が生産末期になり、生産量を落としていたことが伺われる。
- ・ 詳しい皆生温泉と海との戦いは後段に譲ることとして、皆生温泉と浸食の歴史に一応の終止符が打たれるのは、昭和 46 年 4 月建設省が離岸防潮堤（テトラポット）が皆生海岸の沖に敷設されるのを待たなければならない。
- ・ その約 50 年の間に皆生温泉を守ろうとする人々たちと海との壮絶な戦いが続いた。